

平成26年度県内優良果樹技術・経営事例

第16回全国果樹技術・経営コンクール

「全国果樹研究連合会会長賞」受賞者

鳥取西部農業協同組合 米子梨果実部 長谷川 彰一氏・長谷川 美保子氏

1. 推薦要旨

長谷川彰一氏は、大山山系である孝霊山の麓という立地を活かし、高低差を利用しながら、気象災害に対するリスク回避と、魅力ある新品種を導入することにより収穫時期の分散によって労力競合を回避した大規模果樹経営を確立している。

就農後、「二十世紀」梨黒斑病対策に、耐病性品種「ゴールド二十世紀」をいち早く導入し、平成13年に水利用が難航していた大山山麓国営総合農地開発事業に係る畑地かんがい実証調査園を引き受け、「ゴールド二十世紀」梨栽培における多目的スプリンクラーによる、かん水、防除について効果確認し、生産安定につなげた。

平成21年1月に自園を含む甚大な雪害被害により、基幹品種である二十世紀園が壊滅的打撃を受けた。同年、米子果実部長に就任し、先輩方、関係機関と協力して産地復興活動の中心的役割を果たし、鳥取県育成品種「新甘泉」へ、組織的に品種の大転換を図った。平成26年には、「新甘泉」をジョイント栽培した園に、網掛け施設を整備し、無袋栽培した果実の出荷を開始した。併せて、選果場に糖度センサー選果機を導入するため、他の果実部との調整役として尽力した。

また、県内では珍しい、桃の観光農園を経営している。客がもぎとった果実を量り売りする方式で、満足度が高く、県外からも常連客が訪れる名所として定着している。

以上、氏は堅実な経営を実践する技術力の高い生産者であり、のびのびと自由な発想で道なき道を切り開いてきたチャレンジャーでもあり、困難を不屈の魂で乗り越えてきた栄光のリーダーでもある。誠実で木訥とした人柄は、梨づくりの先輩方からも愛され、地域に対する貢献は、真に称揚するに相応しい。

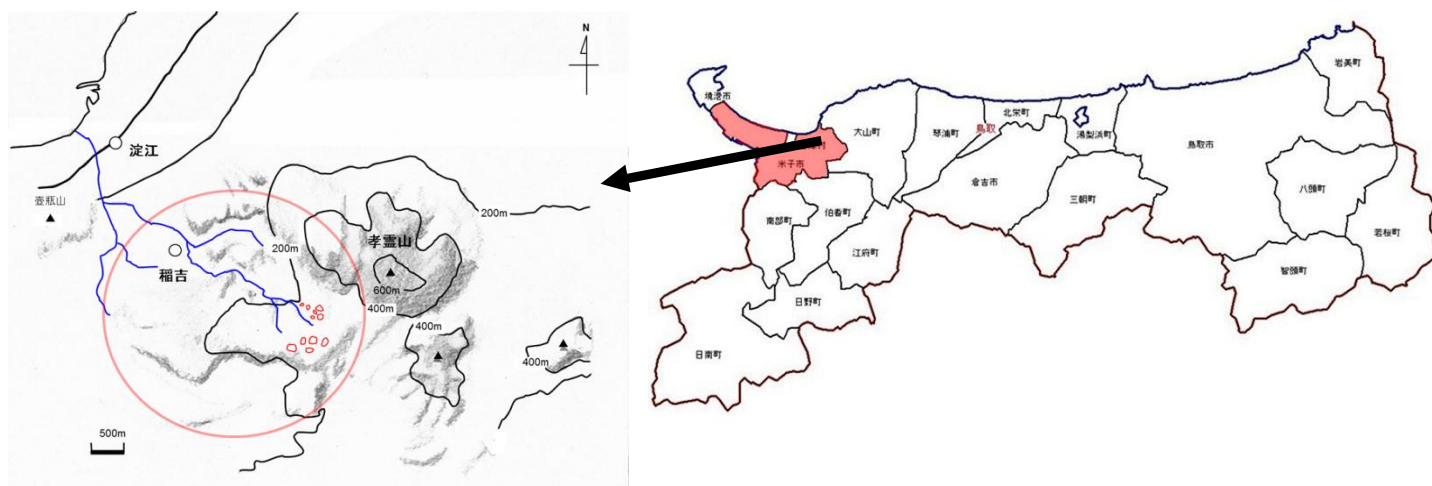
2. 対象経営を取り巻く環境

(1) 立地条件

米子市は鳥取県の西側、山陰のほぼ中央に位置し、面積132.21km²、人口149,911人(平成26年9月現在)である。東に国立公園大山、北に日本海、西には中海という豊かな自然に囲まれている。市の大半は平坦な地形で、東にある標高751mの孝霊山と大山の山裾が連なっている。その一帯には、大山や中国山地に源を発する日野川のほか、法勝寺川、佐蛇川、宇田川などが流れ、日本海に注いでいる。江戸時代には城下町として繁栄し、「商都米子」の礎が築かれている。現在では、高速道路や鉄道、さらには空路・海路の要衝として「山陰の玄関口」の顔も持っている。平成17年3月に淀江町と新設合併し、(新)米子市となった。

そのうち、淀江町稲吉地区は、孝霊山の麓に位置しており、果樹園は、孝霊山の麓に標高40mから300mの範囲に分布している。土壌は、表層腐植質黒ボク土であり、下層は、古生層の赤土であるが、花崗岩が多く、排水性は良いが、土壌改良は困難を極める。

気象は夏季に好天が多く、冬季の積雪が多く、最多雨月も冬になる日本海側気候区山陰型に属している。年平均気温は、15.0℃、年間降水量は1,772mm、年間降雪量133cm、年間日照時間1,732時間程度となっている。



(2) 地域の果樹農業事情

米子市淀江町稲吉地区の梨栽培が始まったのは、明治41年であったと伝えられている。鳥取県の二十世紀梨栽培の黎明期から、栽培の歴史があり、今も90年生を越える二十世紀梨の古木が現存し、現役で生産している。

昭和46年から48年に梨生産が最盛期になり、米子市・大山町・淀江町（現米子市）・岸本町（現伯耆町）の1市3町の10選果場を統合した広域選果場「米子果実共同組合」を米子市二本木に設立した。その後、昭和51年に専門農協とするため「米子果実農業協同組合」が発足した。平成4年に、淀江町小波（現米子市淀江町小波）に移転し、平成14年にJA鳥取西部と合併し、「JA鳥取西部米子果実部」として発足し現在（面積25ha、生産者65名）に至っている（第1表）。

第1表 米子果実部の梨柿品種別栽培面積(

品 種		面積(ha)	
梨 既 存 品 種	二十世紀、ゴールド二十世紀、おさゴールド	10.9	
	ハウス二十世紀	0.2	
	豊水	0.4	
	幸水	1.8	
	新興	2.2	
	あきづき	0.4	
	王秋	0.3	
	あたご	0.1	
	梨 新 品 種	なつひめ	0.5
		新甘泉	1.6
梨	その他	1.6	
梨 合 計		20.0	
柿	富有	4.7	
	西条	0.7	
柿 合 計		5.4	
梨 柿 合 計		25.4	

3. 対象経営の概況

(1) 経営の履歴

長谷川彰一氏は、西部農業高校を卒業後、昭和55年に県立経営大学校（現農業大学校）に進学し、2年間果樹の栽培技術を学んだ。昭和57年に卒業後、直ちに親の基盤を引き継いで就農した。その当時は、梨、水稻、養豚、花、野菜の多角経営であった。梨の基幹品種は老木の‘二十世紀’であり、黒斑病による減収に悩まされていた。氏の就農を契機に、果樹主体の経営に切り換えていった（第2表）。

平成3年より、大山山麓国営総合農地開発事業で造成された団地に、黒斑病耐病性品種‘ゴールド二十世紀’をいち早く植栽した。さらに、自家和合性の‘おさゴールド’も導入し、基幹品種の収量品質の向上によって経営を安定させた。併せて、梨園での水

利用も積極的に推進し、生産を安定させた。また、高低差を活かして園地を分散し、交配時期をずらしながら、収穫時期の異なる品種を導入することにより、規模拡大した。

平成12年には、この地域では珍しい桃の観光農園を開園し、7月に収入が得られる品目を開拓して軌道に乗せた。

平成16年には米子果実部指導部長に就任し、新品種に関する技術情報を積極的に入手し、平成18年には、高糖度となる鳥取県育成新品種‘新甘泉’、‘なつひめ’を導入し、ジョイント栽培について試行を開始した。

平成21年の雪害で自園も甚大な被害を受け、復旧活動にあたりると共に、同年米子果実部長に就任し、組織的に‘新甘泉’、‘なつひめ’への大転換を図った。

平成26年には、‘新甘泉’の網掛け、ジョイント栽培をモデル展示し、無袋化して出荷を開始した。

第2表 就農時と現在の品種構成と面積

就農2年後（昭和59年）		就農21年後（平成15年）		現在（平成25年）						
品 種	面積(a)	品 種	面積(a)	品 種	面積(a)					
既 存 品 種	二十世紀	60	梨 既 存 品 種	二十世紀	53	梨 既 存 品 種	二十世紀	13		
	新世紀	5		ゴールド二十世紀	40		ゴールド二十世紀	13		
	新水	10		おさゴールド	18		おさゴールド	18		
	新興	5		二十世紀系小計	111		二十世紀系小計	44		
梨 合 計	80	豊水		13	豊水		10	梨 新 品 種	幸水	12
				幸水	10		新興		15	
		新興		15	王秋		10		なつひめ	5
		梨 その他		15	梨 合計		164		新甘泉	40
		桃 日川、勘助他		40	全体合計		204		秋甘泉	10
									涼月	5
						梨 その他 あたご、あきづき他	9			
						梨 合計	160			
						桃 日川、勘助他	40			
						全体合計	200			

(2) 経営の状況

経営全体のうち、梨・桃が粗収益の92%を占める。ほぼ、果樹専業経営である。

① 経営規模及び品種構成

280aのうち果樹園が200aであり、梨の中心となる品種は‘二十世紀’、‘ゴールド二十世紀’、‘おさゴールド’であるが、青ナシ中心の品種構成を見直し、品種更新を進めた結果、青ナシの比率を35%まで下げた。新品種はジョイント栽培に移行している段階で、成園率は50%（100a）である。桃は40aで、順次改植中のため成園率は33%（13a）で経営している（第2表）。

② 主要機械・施設

ア) 主要な機械

出荷用1.2tトラック、土壌改良用小型ユンボ、スピードスプレー2台（共同利用）

イ) 主要な施設

多目的防災網（網掛け施設）25a、かん水施設100a。

ウ) 労働力

本人、妻、子、祖母の4人の家族労力が中心。なるべく、雇用労力は使わない方針。

エ) 生産概要

梨の出荷量22,817kgのうち、‘二十世紀’が11,000kgであり、‘新甘泉’5,580kgとなっている。桃は、観光農園で3,970kgをもぎとり方式（客がもぎとった果実を量り売りする）で販売し、市場出荷しない。

(3) 技術・経営的特色

氏は、「鳥取の特産二十世紀梨」で獲得した顧客を大切にしながら、高糖度の新品種を積極的に導入し、家族労力でできる大規模果樹経営を確立している。以下の4点の特色がある。

① 良果多収×高値販売による収益性確保

基幹品種であった‘二十世紀’から黒斑病耐病性の‘ゴールド二十世紀’、‘おさゴールド’への品種更新により、黒斑病による減収を皆無とした。また、果実部長となってから進物販売を組織的に進めた結果、二十世紀梨（‘ゴールド二十世紀’、‘おさゴールド’含む）の販売単価は、3,100円台だったものが、4,000円/10kgを超えた。また、鳥取県育成の高糖度品種‘新甘泉’等を約38%導入し、厳選選果により、高単価で販売している。

② 家族経営を大事に考える創意工夫と品種構成

詳細な労働日誌を記帳し、ことさらに規模拡大するのではなく、雇用労力に頼らないよう創意工夫してきた。人工交配は、果樹園の高度を分散して開花期をずらし、自家和合性品種導入、赤梨の混植等により、雇用労力に全く頼らない。収穫は、7月の桃から始まり、8月の‘幸水’、9月の‘二十世紀’系、‘新甘泉’、‘なつひめ’、‘秋甘泉’、‘あきづき’、10月の‘王秋’、11月の‘あたご’まで分散されている。

③ ジョイント栽培、網掛け、無袋化による省力化推進

平成18年より、今後有望な‘新甘泉’、‘なつひめ’に対して、ジョイント栽培に取り組んだ。平成26年には、同園に網掛け栽培を行い、無袋化し、袋掛けの雇用労賃を70%以上削減した。

④ 桃の観光農園を経営

平成12年より、梨と収穫時期が競合しない桃の観光農園を開園した。主な品種は‘日川白鳳’、‘勘助白桃’で、収穫時期が7月になり、早生梨‘幸水’より早く収益を得られる。園の運営については、妻である美保子氏と後継者である恵氏の裁量に任せている。「果樹園を店舗にする」発想で、客がもぎとった果実を量り売りとしたところ、収穫労力を省き、顧客満足度が高いやり方を確立した。

(4) 地域への波及効果

① 果樹園の水利用について推進の突破口となる

大山山麓国営総合農地開発事業で造成された果樹団地の土壌は、養分保持力は弱く、保水力がやや小さく過乾となる傾向があった。平成13年に畑地かんがい

施設のモデル園を引き受け、果樹園における多目的スプリンクラーの利用による、かん水、防除について展示した。この取り組みが突破口となり、水利用の合意形成が難航していた他地域の生産者を刺激して、鳥取県西部全域における牽引役となった。

② 産地存亡の雪害被害から再生

平成21年1月に稲吉地区で、自園を含む7.2ha、7,700万円の甚大な雪害被害により、基幹品種である二十世紀系の園が壊滅的打撃を受けたことを契機とし、不屈の精神で新品種‘新甘泉’等へ、組織的に品種の大転換（組合の約10%）を図った。さらに、同年3月に米子果実部長に就任し、先輩方、関係機関と協力して精力的な産地復興活動の中心的役割を果たした。新品種への改植運動を進めた結果、被災した農家は、1名も栽培をやめなかった。

さらに、平成26年より、雪害後に復旧した園に、前述のジョイント栽培と併せた網掛モデル園として設置し、‘新甘泉’を無袋栽培し、出荷を開始するなど、旺盛な生産意欲で、周囲を勇気づけた。低コスト化、省力化、生産安定の技術普及の拠点となっている。

③ 新品種の栽培技術について試行錯誤

平成20年には、鳥取西部地区梨指導協議会長に就任し、試験研究機関とも連携し、鳥取県西部地区の新品種導入に係る現地試験の展示、技術普及のための研究会など不断の試行錯誤を重ねた。これらの技術情報の共有化、実践的指導活動によって、導入後間もない‘新甘泉’、‘なつひめ’等の有望品種の栽培技術普及に努めた。

④ 「お客を大事にする」理念

「満足したお客は、自分の本当に大切な人に食べさせようとする。それは、連鎖する」

桃の観光農園経営からの気づきによって、「お客を大事にする」理念を持った。この理念は、米子果実部の役員にも共有され、生産場面から老木の樹勢維持、若木の肥培管理等に気を配り、健全果を適期収穫し、厳選選果し、クレームに誠実に応じる姿勢に応用されている。高い販売単価に結びついている。

⑤ 新甘泉の糖度センサー選果機を整備し、次のステップへ

県の果実部長会で、‘新甘泉’ブランド確立のため、全果糖度選別する方針が決定されており、糖度センサー選果機導入が必須となった。他の果実部との調整役として中心的役割を果たし、国の攻めの農業実践緊急対策事業を活用して、米子選果場への糖度センサー選果機整備を実現した。平成26年産の‘新甘泉’、‘なつひめ’‘秋甘泉’は、全量糖度センサー選果によって出荷された。

さらに、米子選果場への糖度センサー選果機の整備を契機とし、米子果実部は、近隣の果実部と再編統合を含む「魅力ある果樹産地・未来への櫛（たすき）プラン」を一体的に進めることとなった。米子果実部長として責任を果たしながら、プランでは、①こだわりの進物販売、網掛け栽培による無袋ブランドで売っていく②生産者の技術交流を盛んにし、気象災害にも強い産地づくりをする③新品種導入、生産安定による所得向上、ジョイント栽培による省力化推進④新しい担い

手育成、廃園防止と園の継承の仕組みづくりに取り組む。

(5) 今後の経営展開

今後とも、雇用労力に頼らず、ことさら規模拡大するのではなく、家族経営でできるよう創意工夫をこらし、新しく10月の梨‘甘太’の導入を検討し、新しい品目として、柿‘輝太郎’を植栽する。また、網掛けジョイント栽培による、無袋化など、更なる省力化を進め、後継者である恵氏への技術継承を進める。新品種の成園化によって粗収益1,500万円を目指す。

4. 写真



平成13年に設置された水利用の調査圃場 長谷川園
米子市淀江町稲吉‘ゴールド二十世紀’梨園



かん水効果について
収穫果実調査の状況



平成21年1月19日の雪害被害状況



長谷川氏の園も壊滅的な打撃を受けた



2月2日復旧活動の一翼を担い陣頭指揮



120名が10園で復旧活動、1日で作業を無事完了



3月末までに果樹棚施工完了。苗木植栽を完了。



網掛モデル園設置



‘新甘泉’無袋ジョイント栽培